

審議の中心となった。全学的レベルによる図書館改革の検討（東大）をはじめ、現状と問題点の紹介があり、諸外国の事例や豊富な識見が図書館長等から述べられた。

図書館機械化調査研究班研究集会 一第2回一

図書館機械化調査研究班は、現代における図書館資料および学術情報の増加と利用者の要求の高度化に即応し、図書館業務の機械化を研究するため、国立大学図書館協議会の中に設置されたものであるが、10月18日、東大で第2回研究集会がもたれた。

文部省の業務機械化計画（5カ年）によれば、旧帝大、神戸、広島の9大学に高性能パンチ・カード・システム装置(PCS)を、他の66大学に簡易機械化装置（マルチ・カード・セレクター、演算装置付さん孔タイプライター）を導入するための予算が要求されている。PCSの適用業務としては、①選択・発注、②受入・支払、③学術雑誌の管理、④貸出・返却の面が考えられ、目録業務については、MARCテープの利用が考えられるので省かれている。この高性能PCSはカード・システムであるが、将来磁気テープ、磁気ディスクに置きかえられるだろう。その時点においてMARCとの接点が求められる。

東大からMARC（機械読取可能目録）テープの利用について、大学図書館として考えるべきこととして、①大学と国会図書館との緊密化、②大学間のネットワーク、③標準化の問題として目録記入、分類ならびに英書以外の図書の問題、④整理の流れ、組織、人等の内部態勢といった問題点が提起された。

このMARCに関して、国立国会図書館では10カ年計画をもって先ず洋書について、次に日本語MARCの完成を目指している。さしずめ、MARCテープの利用方法については、館自身の洋書の処理（図書選定に利用）と洋書総合目録への適用（MARCテープを利用すれば参加館に図書が入手のつど、LCカード番号を通報すれば、機械的に目録を作成できる）が考えられていることが報告された。

最後にこの研究集会の組織と今後の運営にふれ、実用グループとして、東京を中心とした関東地区、機械化委員会のある近畿地区、小樽商大を中心とした北海道地区の3地区に分けて研究し、その成果を相互に交換、検討し、次回に持ちよることになった。それとともに、簡易機械化については図書館短大、PCSについては神戸大学経営分析文献センター、一橋大、EDPSについては東大医学図書館、小樽商大で開発研究の面で協力してもらう必要があることが確認された。

経済学部図書室11月10日から利用再開

去る9月20日の「共闘派」学生による法経本館封鎖のさい、経済学部図書室の閲覧室と第一書庫が破壊の厄にあった。第一書庫は木製書架242本中の123本が根本からひき倒され、4万6千冊の図書が床などに散乱した。この中には、東京方面にはない戦前以来の貴重な単行書、重要な統計書、地方史資料等が種々ふくまれていた。

立入禁止解除後の24日、早速閲覧室の新着雑誌類、参考図書、オープン・ファイル、カード箱等の復旧を行ない、25日から書架の立て直しと散乱図書の整頓作業を、全図書系職員に事務系男子職員までくり出して開始した。それ以後、日常業務の停滞という大犠牲をはらって、この復旧作業を継続し11月10日に51日ぶりの利用を再開した。